

高津区おはなしアーカイブ

●青山 昭久 (あおやま あきひさ)
さん

昭和8年生まれ 84歳
川崎市高津区溝口在住



◆ご家族や家業のこと

私が生まれたのは中原区の新丸子なんです。その後下野毛へ、更に溝口へと移りました。

兄妹は弟が2人、妹が1人。私が長男で、弟、妹、弟の順で4人兄妹です。弟2人は今も近くに住んでいます。妹は馬絹のほうに嫁ぎました。

私の子どもは息子1人と娘が2人で、孫は全部で7人います。皆、野球大好きの野球ファミリーです。

父は多摩川の砂利採掘現場で総支配人をしていました。多摩川沿いでは質のよい砂利が採れたんです。多摩川は時とともに川の形が変遷していますが、かつて川底だっ

たところに堆積した砂利、これがとても良質なんです。

父は昭和30年代の終わり頃にその仕事の傍ら、土木建材の会社を立ち上げました。現在の会社は父から引き継いだもので、私が二代目ということになります。

最初は青山って名前をそのまま社名に使っていたのですが、平凡な苗字だもんで、似た社名が多くてね。私の代になってから私の名前を一字使った社名に変更しました。

父は若いときに馬に蹴られて足の指を失くし、歩くのが不自由でした。それで兵役に採られなかったんです。でも日常の生活はできたので、ずっと働いておりました。

父は59歳の時に脳溢血で急に亡くなりました。その日まで元気に働いていたんですがねえ。私が24歳の時でした。

それ以来私が会社を継いでおります。

◆小学校の頃

新丸子で生まれたので、下丸子小学校に入学し、2年生になる時に高津小学校に移りました。当時の高津小学校はマンモス校で1学年10クラスほどありました。校舎は古かったですが大きな学校でしたよ。

転校したばかりのころは友達から「砂利屋」って呼ばれてたなあ。

戦時中、高津小学校は兵舎になって、九州の部隊が来ていました。方言で話すから、最初は何を話しているのかわからなかったです。

兵隊さんたちは多摩川の河原に穴を掘っていました。その穴のことを「蛸壺」って呼んでいましたね。機銃掃射の時に避難するための、人間1人が入れるくらいの穴です。私たちは土を運んだりして手伝っていました。

穴掘りの他に、河原にたくさん生えている松の根から松根油（しょうこんゆ）を採取していました。これは飛行機や自動車に使う、ガソリンの代用燃料になるんです。

根っこを掘って車に乗せる。これが兵隊さんの仕事だった。手伝っているうちに兵隊さんとも仲良くなりました。

掘った後に土が残るから、そこをちょっとした田圃にして米を作ったりもしました。今の教育センターのところですね。あそこも河原だったんです。

できた米を仲良くなった兵隊さんに持って行ってあげるとすごく喜ばれましたよ。

小学校の頃には、国道246号線や津田山陸橋、二子橋もまだなかったです。大山街道があっただけです。戦後、津田山の切通しを掘って、その土を埋め立てにを使って246号線を作ったんです。

◆子どもの頃の遊び

父が管理していた砂利採掘場に、掘った後にできる大きな池があって、そこが格好の遊び場になっていました。

泳いだり、魚釣りをしたりね。大きな食用ガエルが獲れたんです。食用ガエルは業

者が買い取ってくれたんです。店で売ってたんですよ。当時は広く一般家庭の食卓に上っていたんです。近くには梨畑もあったので、梨もよく食べました（笑）。

夏になる前、5月頃から秋口まで、けっこう長い間泳いでました。禰いっちょうでね。皆、学校から帰ると「青山の池に行こう」ってね。父が管理していたから、そんな風に呼ばれてたんですよ。

池は縦が数百メートル、幅は5～60メートルくらいあって遠浅で、まさに「自然プール」といったもので最高でした。池の水は、要は湧水ですが、青く澄んでいてもきれいでした。飲んでも大丈夫でした。下の方は冷たいけど、上の方は暖かいんです。川と違って流れないからね。中州みたいに島があるから、そこで甲羅干しをしたり、泳いだ後の禰を干したりしました。

フナなどが釣れるから串に刺して焼いて食べたりもしましたよ。草も生えてない砂利場だから火事の心配もないしねえ。安全な絶好の遊び場でした。

管理責任者である父の指示があって、その池に入れるのは男子だけ。女の子は「危ないから」という理由で入れなかったんです。

子母口だの遠くから小学校が違う子も聞きつけて来て、友達になっちゃいました。多いときだと50人くらい来ていました。おかげでものすごく友達が多かったですよ。

近くで働いている人が水汲みや水浴びにきたりもしていましたね。

◆小学校卒業後

高津小学校から高津中学校に進みました。中学校を昭和24年に卒業し、その後、橘高校に行きました。

橘高校は最初高津中学の脇にあって、しばらくして今のところに引っ越したんです。

高校の時から昼は父の仕事を手伝っておりました。だから高校は夜間部で4年間です。

そのころ夜間部は人数が多かったですよ。1学年に6クラスありました。

仕事帰りにトラックで通ってましたね。そうしなくちゃ授業に間に合わなかったから。

免許は18歳で取ったのだったかな。当時は自動車学校みたいなのがあったんだろうけど少なかったですね。

学科は自分で勉強しましたが、運転実技の方は、助手として車に乗っているうちに、運転手に教えてもらいましたね。

教えてもらうのが楽しみで、たくさん教えて欲しいから、一生懸命車にワックスをかけたり、運転手にプレゼントをしたりしましたよ。運転手に好かれないとハンドルを持たせてもらえなかったんです。

当時、警察もそんなにうるさくなかったからねえ、運転手についてもらって東京駅

まで運転していったこともあったな。

それが私の自動車学校でした（笑）。

◆砂利採掘の様子

昔は府中県道の辺りも多摩川が流れていたと聞いています。多摩川の川岸の幅200メートルくらいまで、今の大正堂のあたりまでが砂利穴だったんです。地質は砂利層なんですよ。

砂利層は深さが20メートル以上あるんです。頑丈で、水はけもととてもいい。この地域の地盤は水害にも地震にも強くて最高の地盤です。

砂利採掘は私が生まれる前から始まっていたと思います。東急さんが手がけた砂利場は、全部で2万坪ほどあったと聞いています。

昔は川から砂利場まで機械船が通る水路をつくり、船を浮かべて砂利を掘っていました。

広い砂利場を深さ20メートル以上掘るので、その後に巨大な穴ができるわけです。そこに水が溜まってプールみたいな池ができたのです。

掘るのは機械船で掘っていました。掘った砂利を、大きさや品質などで選別します。粒の細かい良い砂利はベルトコンベアで車に積みましたが、それ以外は石炭スコップっていう大きなスコップで手作業で積んでました。

砂利は「東急砂利」が扱っていたんだけど、東急さんが掘ったところは府中県道から土手まで、広いところでは幅が500メートルくらいありました。砂利は近所の建材屋さんなどが箱型トラックでとりにきていました。一番大きいのは4トン車でしたね。戦後になると、日本の車じゃなくて、たいていはフォードとかシボレーとか、そういうアメリカ車になりました。ピカピカに磨いてあって、何とも言えない音でカッコいいんです。手伝う代わりに運転手に頼んでハンドルを触らせてもらったり、東京まで乗せてもらったりもしました。深川に生コン工場があって、そっちに運んでいましたよ。



◆戦争の思い出

空襲は毎日のようにありましたよ。でも焼夷弾を落とされることはなかったです。やられたのは機銃（機関銃の略称）です。近くに日本光学があったんで、これを目標にされて、機銃で攻撃されていました。アメリカは日本のどこに何があるか、全部調

べ上げていたんだね。

あと、津田山に高射砲（地上から航空機を攻撃するために作られた火砲）の陣地があったからね、それでB29が来なかった。高射砲はものすごく精度がよくって何機か撃ち落としたりって、そう聞いていますよ。

もちろん、家の近くに防空壕は作ってましたよ。でも使ったことはなかったです。

東京がやられたときはこの近くからでも赤く燃えているのが見えていました。当時は、津田山を登ると新宿が見えたんだよね。

明治製菓が焼けた時には、焼け焦げた砂糖を随分食べました。当時、砂糖なんて貴重なものでしたからねえ。色が赤っぽくなっているだけで味はちゃんと甘かったですよ。

戦後になると、G I（アメリカ兵の俗称）さんが砂利を運びに来て、おかげで片言の英語も覚えたし、チューインガムだのタバコを貰ったりね。チョコレートやガムは友達みんなで分けて食べました。

貰ったタバコを持って帰ると父が喜んでねえ。（笑）そのころはタバコがなかなか手に入らない時代だったからね。自分で手で巻いたりしていたんですもの。そういう貴重なタバコも「パパに持っていけ」ってケースでドーンとくれたんです。

私はある意味では恵まれていたんですね。戦争といっても父も母も一緒にいることができたし、砂利山しかないこの辺りは空襲に狙われることもなくて安全でしたからね。

食べ物もあまり不自由しなかったですね。母の実家が農家だったし、少しだけ河原に田圃もあったし、砂利の作業に秋田の人を雇ってたんで、その人たちの実家からもお米を送ってもらえたりね。

◆地域への思い

私ね、52歳のときに、土木機械を点検していて落っこちて、頭蓋骨骨折、脳挫傷っていう大怪我をしてるんです。それが一ヶ月の入院で、後遺症もなく回復できたのは、幸運でした。

振り返ってみれば、地域の人とつながって、いい人生を過ごさせてもらったと思います。

若いころから力になってくださった方から「心を開いて話せば分かり合えて、争いになることはない」、「感謝の気持ちを持つことが大事だ」と常に教えられてきました。地域の問題について相談を受けることも増えてきましたが、周りの皆さんに支えられてここまでこられたのだから、これからは地域の役に立つことを色々やっていきたいと思っています。

(平成29年9月8日取材)